

古谷教授の批判に對して

柴 田 敬

I

古谷弘教授は本誌第3巻第3號において、拙著「ヒックス循環論批判」に對する批判を發表された。私は、いろいろと教えて頂いた事に對して非常に感謝しているのであるが、教授の批判の中には、どうものみこめない點もある。それで、どの點を承服し、どの點をなぜ承服し兼ねているかを簡単に述べ、後者の點について改めて御教示を仰ぐことにする。

批判の主要點は、(1)「動數的均衡の下においては貯蓄は投資と一致しない」と言う柴田のヒックス批判は current saving と proper saving との相違を見落した誤謬にもとづく、(2) 所得式を無視して獨立投資増加率 g'' と產出量増加率 g との關係を云爲するのは誤りであり、而も、所得式を考慮に入れるならば「一定の條件の下においては g'' は g よりも大となる」などという結論は出せなくなるはずである、(3) 柴田の方程式(7)は「獨立投資が產出量と同一率で成長する」ことを含意しているので、正反對の意味を持った他の方程式とそれとを結合させることは誤りであり、そのような結合によって導き出された方程式を基礎にして何等かの結論を出そうとすることは誤りだ、(4) 動的均衡の場合には獨立投資が存在することによってはじめてヒックスのいわゆる(a), (b), (c)型の乖離の可能性がでてくるので、「獨立投資の存否は動的乖離理論に對し無關係である」と論ずるのは誤りだ、という四點から成っている。

もともと私がヒックス循環論に關心を持ったのは、ヒックス「循環」論のそのもののためではなく、永い間私が没頭して來た資本主義の長期的運動法則の究明に關してそれが問題處理上の或るヒントを與えて呉れるように思えたからである。拙著は、その點をヨリ正確につかもうとして努力しているうちに氣付いたいろいろの疑問の點を一つの體系にまとめた、私の本來の研究の上の副産物とでもいふべきものであった。けれどもそれは單なる副産物ではない。序文の中で述べておいたように、その一部分(例えば第七節)において私は、私の長い間の研

究成果の一部分を、ヒックス的な表現をかりて(ヒックスと對象させて)述べた。私があえて此の小著を公にしたのは、主としてこの點あるが故であつた。ところが、古谷教授の批判(2)及び(3)は、まさに拙著この精髓部分に關するものである。従つて、もし教授が批判(2)及び(3)で主張されるように、そこにおける私の「結論」が誤っているならば、それは、此度の拙著にとつてはまさに致命的である。

それで、以下において私は、批判(2)及び(3)に主力を置きながら、教授の批判に對して順次に答えていくことにしよう。

II

批判(1)について、

私は、current savings と proper savins との相違を見落していない。私が主張したのは、いやしくも「貯蓄と投資との一致」が均衡條件の一つとして云爲されている限り、そこにおける貯蓄は proper savings であるはずであり、この意味の貯蓄は動的均衡の場合には投資と異なる(もちろん lag のある場合において)はずだ、ということである。

批判(2)について、

私が所得式——例えば私の方程式(1)——を無視して g と g'' との關係を論じたのは、教授が指摘されるように、たしかに私の間違であつた。實は私は、他の仕方で到達していた結論が方程式(20)から得られる事について氣を許して、その方程式(20)が方程式(1)を考慮に入れていないことに、氣付かなかつた。私は方程式(20)の導出に際して方程式(1)を考慮に入れたつもりであつた。この重要な點に關する私の見落しを教えて頂いて、私は感謝にたえない。

しかしながら、「所得式を考慮に入れると柴田の主張するような「結論」は出せなくなる」という教授の含意には、私は賛意を表し得ない。私は、所得式を考慮に入れても私の「結論」そのものには何等の變化も生じない、と思う。私のこの主張は次のようにして證明される。

所得式——すなわち、例えば拙著の方程式組織の中の方程式(1)——および方程式(2)を考慮に入れると、方程式(20)は、

$$(1-g')\{vgI_{10}L^{-1}+vgI_{a0}L^{-1}+(1+g)^2I_{a0}\} \\ =vgI_{10}L^{-1}+vgI_{a0}L^{-1}+(1+g)^2I_{a0}(1+g'')^{-1} \\ \dots\dots\dots(20)'$$

となる——そこに於てLは $\{1-(1+g)^{-1}(1-s)\}$ 。従つて:

$g=g''$ ならば、 $(1+g)^2I_{a0}=(1+g)^2I_{a0}(1+g'')^{-1}$ であるから、方程式(20)'の左邊の大括弧の中は右邊と一致し、従つて、 $g'=0$ となるが;

$g < g''$ ならば、 $(1+g)^2I_{a0} > (1+g)^2I_{a0}(1+g'')^{-1}$ であるから、方程式(20)'の左邊の大括弧の中は右邊よりも大となり、従つて、 $g' > 0$ となる。すなわち、「 g' が零であるかぎり g は g'' と一致するように見えるが、 g' が零より大である限り g は g'' よりも小でなければならぬ」という私の結論がでてくる。(なお、次項参照)。

批判(3)について、

私は、當面の方程式組織において、 s^0 なる記號を「 n 期の貯蓄係數」(32頁)、 s_1 なる記號を「 $n+1$ 期の貯蓄係數」(45頁)と規定している。従つて、方程式(7)

$$Y_0 = vg(1+g)^2 + I_{a0} + (1-s) Y_0 (1+g)^{-1}$$

を一期ヅラせたものは、

$$y_0 = vg(1+g)^2 + I_{a1} + (1+s_1) Y_0 (1+g)^{-1}$$

となり; これらの二つの方程式から得られるものは、

$$I_{a0} - I_{a1}(1+g)^{-1} = (s_1 - s) (1+g)^{-1} Y_0$$

であつて、教授が考えておられるように

$$I_{a0} - I_{a1}(1+g)^{-1} = 0$$

ではない。教授がこの最後の方程式を方程式(7)から導き出し得るものと考え、従つて、「方程式(7)は「獨立投資が產出量と同一比率で成長する」ことを含意する」と考えられたのは、教授が、 s 及び s_1 という私のnotationsの規定を見落されたことによるのではなからうか。教授は批判(2)において、私に向つて、「 $Y_0(1+g)^t = cY_0(1+g)^{t-1} + vgY_0(1+g)^{t-2} + A_0(1+g'')^t$ という式から $g \neq g''$ のままで Y_0 あるいは A_0 の高さを t から獨立に求めて頂きたい」と言つておられるがそれは、「時がうつるにつれて、 s は s_1, s_2, \dots となる; (従つて、私の場合には、 c_0 は c_1, c_2, \dots となる)」ということを見落しておられるからではなからうか。

批判(4)は確かに教授の言われる通りであると思う。この點は私の間違であつた。誤謬を指摘して頂いた事に對して、私は深く感謝する。(1952・8・13)

第3卷 第3號

正誤表

頁	側	行	誤	正
185	左	上 8	I_0	I_1
186	右	上 11	D 式	P 式
194	左	上 2	$\frac{\partial Y_1}{\partial x_{1-n}} = \frac{P_n}{P_1}$	$\frac{\partial Y_1}{\partial x_{1n}} = \frac{P_n}{P_1}$
194	右	下 4	$x_{2n} = b_{2n} \frac{P_1}{P_n} Y_2$	$x_{2n} = b_{2n} \frac{P_2}{P_n} Y_2$

219 右 表 誤

正

牛 (萬頭)	8,500	9,160	8,590	9,200	6,660
羊・山	8,550	9,160	8,550	6,200	6,600

牛 (萬頭)	4,740	5,450	4,760	6,450	5,090
羊・山	8,550	9,160	8,550	9,200	6,660